

「ほとけの“すがた”を現わす」

本山布教教化部出版室長 蔵重 宏昭

先日初めて、栃木県宇都宮市に所用で伺いました。広広とした平野でゆったりとした素晴らしい雰囲気のある街だというのが第一印象でした。そして特徴的だったのは、石で造られた重厚な蔵が点在していたことです。「ごつごつとした良い風合いの石材は何ですか？」と乗せて頂いたタクシーの運転手さんに尋ねますと、地元名産の「大谷石」とのこと。

かつて日本が海の底だった太古の昔、火山噴火で海水と混じった火山石が隆起し出来上がった石だそうで、なんと冬の気温低い時ならば、大谷石の採石場跡（※現大谷資料館）に於いて、「石の華」と称した塩の噴き出し（塩の結晶）がびっしりと浮かび上がるそうです。

そのお話を聞きながら、今は「大谷石」としての形があるけれど、ある条件を整えればかつて海の底にあった“すがた”を目に見える形で現わすのだなあ、とロマンを感じました。

そしてふとその前日に行った地元鶴見の「本町通り子ども園」での坐禅会のことを思い出しました。小学校に上がる直前の年長組に月一回坐禅指導を続け、その時で3回目でした。

初回の頃はごそごと動き回りキョロキョロと落ち着かなかったけれども、3回目ともなれば何と大半の園児たちが結跏趺坐で坐ることが出来ているのです。わずかな時間でしたが、普段は騒がしい園の遊戯室もその時はシーンと静まり返った敬虔な時間が流れ、そこには坐禅に各各懸命に取り組む園児たちの、ほとけとしての“すがた”が現れたことでした。

本山開祖瑩山禪師様の著述『伝光録』に「衆生即仏性なり。仏性即衆生なり。」とお示しがあります。「わたしたちは誰もがほとけとなる性質があり、（つまり）ほとけとなる性質とはすなわち（ほとけの行いを為す）私たちのことである」ということです。

普段は大騒ぎの園児たちも、皆一斉に静かに坐わり足と手を組むといった条件を整えれば、たちまちほとけの“すがた”が目に見える形で現れるのです。多くのほとけの“すがた”が現れているその素晴らしいひと時には、私も負けじと人知れずずっと背筋を伸ばし、ほとけの“すがた”で応える毎月です。（終）